ミネソタ旅日記

October 2 ~ 8, 2012

（1）現 地 集 合

10 月 2 日（火）17:30～20:00 （at Restaurant「B.A.N.K.」88, South 6th St. Minneapolis）

ミネソタ旅行は現地集合であったため、参加者全員が顔を合わせたのはミネアポリス･ダウンタウンのレストラン「B.A.N.K」であった。元は NORWEST BANK があったところで、レストランの内装にも銀行当時の面影が残っていた。

現地時間で 10 月 2 日夕刻 6 時に集合した。Delta 航空で成田からの直行便（8 人）、American 航空（2 人）、数日前に渡米しその後ミネアポリスに入った人（4 人）それにミネソタ在住の梅津さんを加えて総勢 15 名が無事に到着し再会した。ゲストにミネソタ大学で長年留学生の支援にあたってこられた Mestenhauser 先生ご夫妻と Zaidi 先生ご夫妻、旅の準備を支援してくださった MEET MINNEAPOLIS の Bill Deef さんと宮本祐子さんをお招きした。無事の再会とこれからの旅の安全を祈って乾杯をした。落ち着いた雰囲気の個室テーブルで、ワインと共に運ばれる料理を美味しくいただいた。ゲストを含め自己紹介と歓談でゆったりとした時間が流れる・・・。

（2）Minnesota Trade Office

10 月 3 日（水）10:00～11:00 （Minnesota Trade Office: 332, Minnesota Street, Saint Paul, MN）

ホテルから貸切り乗用 VAN を使ってセントポール市内にある Minnesota Trade Office を訪ねた（途中、ミシシッピ川岸や Summit Avenue 等の紅葉が素晴らしかった）。このオフィスは州の雇用経済開発部（DEED）に属し、主としてミネソタ州内の中小企業に対して海外への事業展開を支援することを目的としている。そこで、私達の訪問目的に合わせて、ミネソタ州の経済やビジネスの現状について一般的な理解を深めるプログラムとして準備して下さった。

Minnesota Trade Office では、Acting Executive Director 兼 Deputy Director)の Ed Dieter さんと、International Trade Representative の Jennifer Kocs さんが我々を出迎えてくれ、Jennifer さんから、ミネソタ州について、下記の様々な説明をうけた。

ミネソタ州の経済活動は、他の州の水準に比較して、大変活発で安定している。（１）一人あたりの GDP 及び GDP 成長率は全米 13 位、（２）一人あたりの個人所得額と平均家計所得は全米 14 位、（３）就労率 71.2%は全米 3 位の高水準である。（４）直近の失業率は、全米平均の 7.8%に対しミネソタ州内は 5.8%で 2.0%も良い。この雇用が安定している理由のひとつに教育水準の高さにある。（１）高校卒業資格を持つ住民数の割合(91.8%)は全米 2 位,（２）大学卒業資格を持つ住民数の割合(31.8%)は全米 11 位である。質の良い労働力を求めてこの地にビジネスの拠点を置く企業が増えている。フォーチュン 500 のリストの内 20 の企業がミネソタに本社を置く。本社拠点数 / 人口比でみると全米トップである。

ミネソタに本社を置く主たる企業名を並べてみる。
老舗の 3M Co, Cargill, Pillsbury, Hormel, Delta Air Lines, Target, Best Buy
金融の US Bancorp, Thrivent Financial for Lutherans
比殻的新しい会社で Medtronic (医療), Ecolab (環境), SuperValu (食品小売)
それに、アメリカ最大のショッピングモールである Mall of America を加えておこう。

（３）陶芸家 Warren Mackenzie のアトリエ

10 月 3 日 11:00～12:30 （Warren Mackenzie Pottery, Stillwater, Minnesota）

アメリカの先進的な陶芸家 Warren Mackenzie のアトリエはミネソタ Stillwater 郊外にひっそりと隠れていた。建物から笑顔で姿を見せた Mackenzie は作業着姿の自然体の老人であった。早速、私達を住居宅の横に造られた工房へと案内し、自らと自らの作品について語り始めた。彼は 1924 年にイリノイ州で生れている。1949 年から 52 年に妻 Alex を伴いイギリスに渡り、Bernard Leach の下に弟子入りをした。

親日家 Barnard Leach は既に日本の陶芸家・濱田庄司との親交も厚く、1920 年～23 年に二人がイギリスで窯を築き作品展を発表している。かかる経緯から、Mackenzie は Leach を通して、濱田や益子焼の作風に強い影響を受ける。本人が語る自らの作風は日本の民芸陶器を目指している。民衆生活の中に根差した素朴で実用に供する作品をミネソタの地で咲かせたいとの思いから「Mingei-sota Style」と名付けている。2004 年に 80 歳の誕生日を迎えたと聞いているので今年で 88 歳になる。それほど丈夫な身体とは思えないが、遠来の客をもてなすべく自ら轆轤を回して作品造りを見せて下さった。

MacKenzie は陶芸家であると同時に 1952 年以降ミネソタ大学での良き先生でもあった。彼を師と仰ぐ多くの生徒から新たな作品・作風が生れている。Mackenzie の作品はアメリカの多くの美術館に点在するが、ここミネソタ大学の Weisman Art Museum の一角に常時展示されている。

（４）Stillwater & Austin 観光

10 月 3 日　13:00～17:00　(Stillwater, Minnesota & Hudson, Wisconsin)

その後、Stillwater のレストラン Reve324 でランチ。Stillwater は、Minnesota の発祥の地とも称される町で（ニックネームは Birthplace of Minnesota）、1848 年に Stillwater で開かれた地域集会の領域が、翌年ミネソタとして公認され、1858 年のミネソタ州誕生へとつながっていった。Main Street に沿って、当時の面影を残す街並みが残り、観光客相手のアンティークやアクセサリーを扱う店などが連なっていた。観光用トローリー風バスも週末には運転しているようだ。

町を流れる St. Croix 川は、下流の Hastings でミシシッピ川に合流するが、大きな船が通ると、一部分が持ち上がる、Lift Bridge が街のシンボルである（参加者の中で八木澤さんが幸運にも Lift の瞬間に立ち会い、写真に収めることが出来た）。

5 時までに Minneapolis に戻る VAN との契約時間が、まだ残っていたので、ドライバーさんと相談の上、河を渡って、対岸の Wisconsin 州、Austin に行き、St.Croix River の岸辺の Picnic Area で連れて行ってもらった。この日は素晴らしい秋晴れの、暖かい一日で、紅葉も美しく、参加者一同、Indian Summer の贈り物に感謝した。米国中西部のボーイスカウトキャンプの発祥の地を記念した、可愛いボーイスカウト像を写真担当の八木澤さんが撮影。

（５）Zen Box (IZAKAYA)

10 月 3 日（水）17:30～20:00　(ZEN BOX　602, Washington Ave. South, Minneapolis

２日目の夕食会はミネアポリスのユニークなレストランを訪ねることにした。実は、このレストランは梅津祐良さんの息子さんが Chief Chef を務めお店のマネジメントしている。

ゲストに University of Minnesota, Office of International Programs のナン薫さん、Ph. D 学生の鎌田武仁さんご夫妻、昨日に続き Mestenhauser 先生をお招きしての夕食会となった。

気楽なアットホームな雰囲気のお店である。日本の食材を使ってはいるが、そのアレンジメントとテイストはオリジナリティに富み、ミネソタ・ローカルに根付いている。私達が入って３０分も経たないのにお店は満席であった。Chief Chef の Junji Paul Umezu さんに会って、その明るいキャラクターからも、このお店が顧客に愛される理由も容易に理解できる。豊富な日本酒を飲み比べるのもこのお店に来ての楽しみ方と思われる。

（６）ミネソタ大学：Alumni Association

10 月 4 日（木）10:30～12:00　(McNamara Alumni Center, 1200 Oak Street SE, Minneapolis)

U of M Alumni Association は卒業生のグローバル・コミュニティの連携を通して、卒業生と大学の双方に奉仕する NPO 法人として活動している。その会は 1904 年に発足し 2004 年に 100 周年を迎えた。その 100 年の歩みは会のホームページに掲載されている。

私達は会のオフィスがある McNamara Alumni Center を訪ねた。会議室で Mr. Bruce Rader と他のスタッフが迎えてくれた。U of M の現在の学生数は大学院生を含めて 50,000 人であるから、毎年 10,000 人近い卒業生を送り出している。その受け皿になる Alumni Association に登録されている卒業生数は 400,000 人を超えている。その同窓会名簿が一冊の本になって会議室のテーブルに置かれてあった。厚さは電話帳に匹敵する。ブレークの時間に私達はその名簿のなかに自分の名前を探した。全員が名前を確認できたようだ。ただ、連絡先の住所・電話番号は昔のままで更新されていない人が多い。私事ですが、兄が 1960 年に修士課程を終えている。名簿が学部や卒業年度に関係なく、ＡＢＣ順にリストされている。その結果、私の名前の次ぎに兄の名前を発見し嬉しく思った。

この会の運営は 26 名の常勤スタッフと学生インターン 6 名で行っている。その他に学部ごとにオフィサーが任命されている。昨年は約 412 万ドルの収支報告を行っている。収入の半分は会員の年会費、永久会員のファンド収入、寄付から成り、あとの半分は講演会や音楽会を代表とする幾多のプログラム運営収入と大学からの補填(16%)で構成される。グローバル組織としての会の活動・連携も重要な仕事である。現在約 70 カ国に International Chapters が展開されている。日本ミネソタ会もその一つで会長・岩波はるみさんの名前と共に登録されていた。

最後に McNamara Alumni Center の建物について書いておきたい。1998 年に着工して 2000 年の 2 月に完成した。University Avenue と Oak Street SE の交差点に位置し、新しい TFC フットボール・スタジアムが隣接する。その外観はユニークで、通常のオフィス・ビルの右サイドに台形の大きな傘を２本立て掛けた姿をしている。傘の下には５・６階相当の大きな無柱空間のアトリユームをつくり、受付とパブリック・スペースを配置している。

オフィススペースは通常のオフィス・ビルの２階以上におさめている。インテリアの特徴は、大きな傘の下はガラス壁面とし外の景色と空間を内部に取り込み、傘と外壁に使われた銅版を内部のインテリアにもふんだんに使用している。このパブリ

ック・スペースと建設後に増設されたメモリアル・ホールは、年間 900 以上ものイベント会場として使用されている。私達のフェアウェルパーティも後日ここで行うことになる。

（７）Welcome Luncheon Meeting (U of M 主催)

10 月 4 日 12:00～14:00 (Campus Club, 4F, Coffman Memorial Union, U of M)

私達のミネソタ訪問を歓迎して大学側が、Coffman Union の Campus Club で昼食会を用意してくれた。ミネソタ大学から Global Programs and Strategy Alliance や International Student and Scholar Services, Learning Abroad Center, Office of International Programs 等の関係者が多数参加してくれた。

主催者を代表して Ms. Diane Young (Development Director, GPS Alliance, U of M)より、日本ミネソタ会の一行を歓迎する挨拶に続いて、ゲストである日本国名誉総領事の Dr. Mirja P. Hanson、日本ミネソタ会から会長の岩波はるみ、そして参加者一同で 500 ドルの寄付をした SWCH (Small World Coffee Hour) のアドバイザーから御礼のスピーチがあった。

同席したテーブルで Dr. Mirja P. Hanson と話すことができた。日本国名誉総領事として日頃から各種の日米の交流会合に出席しているという。彼女のような肩書で仕事をする方は全米で 20 名程度いると話されていた。ワシントンの日本総領事館の出先機関としての仕事も彼女の任務の範疇である。

Ms. Diane Young がミネソタ大学の初期日本人留学生の紹介をしてくれた。
(後日送られてきた彼女の資料から最初の 5 名を次の様に整理できる)

Mr. Yasuzo Sakagami: Bachelor's in 1897 and Master's in 1899 both in literature
Mr. Yasuharu Kato: Graduate student at the College of Agriculture in 1895
Mr. Tomesaburo Shimizu: the first Japanese Law student in 1906
Mr. Seimin Inaoka: graduated- the College of Science, Literature and the Arts in 1907
Mr. Yoshio Tanikawa: graduated-the College of Science, Literature and the Arts in 1909

（８）Mall of America

10 月 4 日 16:30～20:00 （Mall of America, Bloomington, Minnesota）

夕方 4 時半頃からアメリカ最大のショッピングモールと呼び名も高い Mall of America に出かけた。ダウンタウンから都電にあたる Light Rail に乗り終点まで 30 分程の距離にある。

確かに大きくて広いーそれもそのはず、1992 年に野球場であったメトロポリタンスタジアムの跡地に地上４階のショッピングセンターをオープンさせた。建物の特徴は、矩形対称形の４階建で、建物の中央部分を１階から３階までを吹き抜けとし、そこに大きな屋内遊園地を造った。建物の四隅にデパートメントストアを置き、それらを繋ぐように各階のショッピングフロアが延々と続く。内部を東西南北の 4 つのゾーンに分け、自分の位置を分り易くしている。現在 3 つのデパート（Sears, Macy's, Nordstrom）、520 のストアと 50 のレストラン、それに水族館・劇場などのアミューズメントが揃っている。

私達は入口で 2 時間後の待ち合わせ場所を決めて、三々五々に別れ買物・見物に出かけた。到着してから日ごとに寒くなるミネアポリスの気候に備えて、私もセーターを買おうと思った。セーターを扱う店などいくらでもありそうなのだが、ストアの予備知識なしに探すとなると大変である。日本でもそうだが、あの店のMサイズは大きめなのでＳサイズが丁度良いといった決め打ちができない。だから一軒一軒訪ね歩くことになる。色・柄・サイズがぴったり来るのはなかなか見つからない。結局は疲れ果ててあきらめ、古くなった時計バンドを取り換えることでシッピングを終える。

待ち合わせ場所の ”Bubba Gump Shrimp” のシーフードレストランに全員が集まり夕食会になった。ワインを片手に幾種類もの料理を皆でシェアーする。今日の買物のこと、昨日訪ねた St.Croix の更けゆく秋の景観、カナダに戻る藤井ご夫妻へお別れの乾杯などなど・・。時間の経つのを忘れて話がはずむ。楽しい夕食のひとときであった。

（９）AVEDA 訪問

10 月 5 日（金）10:00～11:30 （AVADA Company, Blaine, Minnesota）

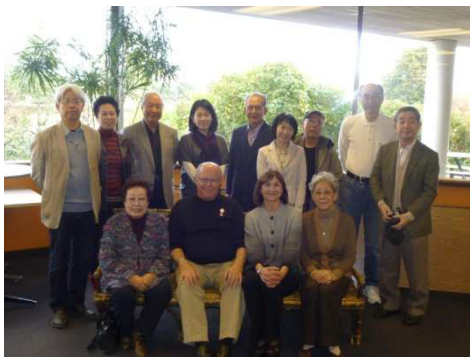
私は今回の旅行に参加して初めて「アヴェダ」化粧品を知った。その化粧品がミネソタ発のグローバル商品であり、ユニークな経営方針と商品開発で成長してきた会社であることも今回の工場見学を通して知る。

会社はインド 5000 年伝統的医学である「Ayurveda: アーユルヴェーダ」を

健康の基本的な考え方に置いている。病気になりにくい心身をつくり病気を予防し、健康を維持する「予防医学」の考え方に立っている。会社の名前もこの言葉から由来する。また、会社の使命がさりげなく玄関を入った壁面に文字壁画としてデザインされている。私達を迎えてくれた長身でハンサムな社長 Dominique Conseil が工場見学に入る前に、他の女性従業員を先導して、その「Mission Statement」を唱和したのには少しびっくりした。

日本の企業風土と似たものをその後の工場見学でも発見する。従業員の改善提案、目で見る品質管理、従業員の無事故記録連続日数、無駄を省く節電標語、従業員の為の幼児保育所などなど・・。これらの経営方針・行動指針は、今まで日本のお家芸としてきたものだが、もはやグローバル企業であるなら「あたり前」のように浸透している。

AVEDA が商品開発にあたり徹底した考え方は「Green Ingredients」であると言う。全ての化粧品の原材料を「健康に良いと言い伝えられる」薬草・草花・木などを全世界から集めてその成分を分析・抽出する開発法である。その結果として生れた商品群に Hair Care, Hair Styling, Skin Care, Body Care, Make-up, Pure-fume などがある。AVEDA は 1997 年に Estee Lauder の傘下に入るも AVADA のブランドはそのまま維持使用されている。



会社を去る前に参加者全員が AVEDA の社員と一緒に写真を撮った。ところが、先程まで工場見学に付き添っていたハンサムな社長の姿がなかった。女性陣からは残念の声がしきりであった。会社の入口に設けられた展示即売店で参加者のほぼ全員がそれぞれの家族・親戚・友人への買物をした。

午後 2 時～4 時まで、八木澤、梅田、岩波の 3 名が J-Café に参加した。J-Café は、主催の児玉さんたちの働きかけで、毎週金曜日午後 2 時～4 時、キャンパス内の Nolte Restaurant という施設を借りて（その時間は Restaurant として営業をしていなかった)、日本に興味のある学生たちが集う会である。　この日も出身は様々な 30 名くらいの学生たちが参加していた。アメリカで人気の忍者ゲームなるものを教えてもらったり、八木澤さんが折り紙で化学物質を作成したり、和気藹々の交流が楽しめた。光山さんからの差し入れのお菓子も大好評でした。（岩波）

（１０）市 内 観 光

10 月 6 日 9:30～13:00 (Minneapolis & Saint Paul City)

観光バスに乗ってツインシティの市内観光に出かけた。定番のハイライトスポットを短時間で見て回ることは学生時代にもなかった経験だけに楽しい数時間だった。ミネアポリスのダウンタウンを出て、モール・オブ・アメリカに向かい、最終の乗客をピックアップする。その後、Saint Paul に入りミネソタ州議会・大聖堂・山の手の著名人が住んでいた住宅・ミシシッピ川沿いの景観や建築美のある数々の橋などを車窓から眺める。

Minnehaha Park に立ち寄り休憩をとる。公園を散策しながら、Foreign Student Adviser's Office が留学初年度の学生を対象にここでバーベキュ・パーティを開いたことを思い出した。確か秋の新学期が始まる直前の頃でホストファミリーも一緒に参加したと記憶している。有名な Minnehaha

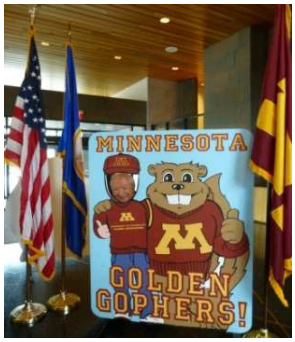
Falls は冬になると滝が雪氷になる。春から夏にかけて、雪解け水が流れ出し勢いのある滝に変身する。夏の雨量が少ないと秋には枯れた滝になることもある。

最後に Guthrie Theater を訪れた。1963 年にオープンした旧劇場を 2006 年に現在の場所に移転して再オープンしたと言うから 50 周年を迎える。新しい Guthrie は大小合わせて 3 つの劇場を持つ。これらの劇場の内部をみることは出来なかったが、普段でも出入りが許されるレストラン・簡易バーに通ずる回廊や展望スペースを見学する。エスカレーターで 2 階部分から緩やかな回廊を登りきると正面に広がる景色はミシシッピ川を下に見て、大学やセントポールを一望にできる。

もう一方の回廊を登りきるとミネアポリスのダウンタウン高層ビルを写真に収めるベストショットの場所がある。これらの回廊は建物構造上の梁を上手く利用して建築美を追求したものである。回廊の窓は梁に沿って窓枠が斜め下に切り込まれ、目線を下に向けさせる。ところが、窓枠の上部には鏡が入っており、小さい子供が窓を見上げても地上の景色が視野に入る。音響・照明など劇場としての本来の評価もさることながら、建物自体の建築美も高い評価を得ている。

（１１）アイスホッケー観戦

10 月 6 日（土）18:00～21:00 （Mariucci Hockey Arena 1901, 4th St. South East, Minneapolis）



“Minnesota Golden Gophers” はミネソタ大学のスポーツ部の活動を総称した呼び名で、あずき色と黄色のリスのマスコットで代表される。6 日（土）の午後 6 時半から Gophers アイスホッケーの試合を観戦した。Ph. D の学生で Research Assistant として大学にも勤務する現地の鎌田さんが、ミネソタ大の男子ホッケーの開幕戦の切符を手配いただいた。お忙しい中ご夫妻で私達 5 名のメンバーをこの開幕戦に案内いただいた。観戦と共にお二人から Gophers Ice Hockey チームの歴史や活躍ぶり伺うことが出来た。

全米学生選手権（NCAA）アイスホッケー部門で過去 5 回の優勝、そしてベスト 4（Frozen Four と呼ぶらしい）に入った回数は 20 回にもなる。その輝かしいチームを育てた立役者が John Mariucci である。ミネソタ生れの彼はミネソタ大学でアイスホッケーとフットボール選手として活躍し、その後アイスホッケーのプロに転向した。彼がミネソタ大学のアイスホッケーコーチに招聘されたとき、カナダのプロチームからも高額のオファーを受けた。しかし彼はそのオファーを蹴って大学のコーチに就任した。コーチ就任後に着手した仕事はミネソタにある高校から優秀なアイスホッケー学生を大学へリクルートし、ミネソタ中心のチームを育てることにあった。そのチームが徐々に実績を積み重ねると、夢を求めて小・中・高のジュニアチームがミネソタ全州に広がり次の世代が育っていった。この選手層の厚さが Gophers アイスホッケーの強みと伝統となった。

彼は、1955-56 年にアメリカアイスホッケーのオリンピックチームのコーチを務め、アメリカに銀メダルを齎した。また、1973 年にはアメリカホッケーの殿堂入りを果たしている。ミネソタ大学が 1993 年にキャンパス内

にアイスホッケーの競技場を建設した際に、彼の功績を称えて”Mariucci Hockey Arena”と命名した。中に入って見るととにかく広くて明るい、収容人員が１万人のアリーナである。

試合は７時に始まった。相手チームはカナダの Lethbridge College である。緒戦から Gophers の強みは素人目にも分った。スピードがある、ボールのキープ率が高い、連携したパス回しで相手チームに攻め込む時間が多い。終わってみれば７対０で、大差をつけての圧勝であった。得点が入るとアリーナの釣り天井の電光掲示板に表示され、独特の節回しのアナウンサーの先導で、観衆が総立ちになって「ミネソタ・ミネソタ・ウォ～・ゴーファーズ」を唱和する。選手と観衆が一体となり、また観客同士が連帯する瞬間でもある。

若さを溢れる激突と攻めに向けての気持ちの切り替えが早いプレイの連続に感動した。楽しい２時間の観戦であった。改めてこのイベントを準備いただいた鎌田さんご夫妻にお礼を申し上げたい。

（１２）チャリティーパーティー

10 月 6 日（土）18:00～21:00 （Ostlund 邸、6 Island Road, North Oaks）

10 月 6 日土曜日の宵は、アイスホッケー組とチャリティーパーティー組の２チームに参加者が分かれた。

North Oaks の湖に面した豪邸で行われた、The Chamber Music Society of Minnesota のチャリティーパーティーには、石田卓三さんご夫妻のご紹介で、沼形義彰、光山忠彦、光山文子、岩波はるみの 4 名が参加した。ミネソタ大学医学部の中川先生のご好意で、パーティー会場まで車に同乗することができ、お蔭様で、中川先生からミネソタの様々なお話も伺えた。石田さんご夫妻は、会場の Bob and Don Ostlund 邸で、手作りのお寿司をふるまわれた。その『美味しさ』は、めったに日本で味わえないもの。外人にもワサビは人気とみえて、あっという間にワサビがなくなってしまい、びっくりした。

Ostlund 邸では、Halloween のかぼちゃも美しく飾られ、木々に囲まれた庭には紅葉の秋が彩っていた。外のテラスでは炉が焚かれ、夕暮れの湖を眺めながらワインを傾けるひと時は、この上もない贅沢な時間だった。宴たけなわの頃に、リビングルームでは素敵な歌とピアノのプレゼントがあり、歌手の方の美声とピアニストの方の優雅な音色に酔いしれた。邸内では、様々なもの（版画からマフラーまで）が出展されて、サイレントオークションが開催されたが、沼形団長が見事落札された「食事券」を、御礼をこめて中川先生ご夫妻にプレゼントなさっていた。 （岩波）

（１３）Lake Minnetonka 観光

10 月 7 日（日）9:30～14:00 （Lake Minnetonka, Hennepine County, Minneapolis）

ミネアポリスから西へ 40 分位走ったところに、ツインシティ郊外の最大の湖 - レイク・ミネトンカがある。湖岸線が複雑に入り組み多数の湾を形成し、ヨットハーバーとして格好の地形ゆえに桟橋が幾つも作られている。夏には気軽に訪れることのできるリゾート地として栄える。皆で乗用 VAN を借り切ってそこに出かけた。秋の紅葉が湖に映え美しい風景が続く。この湖の水はミネハハ・クリークという川を経由して、有名な Minnehaha Fall へと流れ、ミシシッピ川に合流する。

私も学生時代にホストファミリーの Carl Nomura さん家族に連れられて何回か訪れている。ウオータースキーをマスターしようと何度も挑戦した。モーターボートに引っ張ってもらって、水上に浮かび立ちあがるその一瞬が難しい。どうしても前のめりに倒れてしまう。もっと重心を後に・・とアドバイスをもらうが、上手くいか

なかった。苦い経験だが今は良き思い出でもある。この湖の東側にミネトンカ市があり、Tonka Toys の会社があった。日本からビジネス一行が来た際に通訳のアルバイトをしたことがある。40 年経った今もこの会社は健在で子供が乗って遊ぶトラックや無線で飛ばすヘリコプターを作っている。

湖畔を望む絶景の場所にレストランがある。その名は Lord Fletcher's と言い、いつも予約で満席になる店だ。私達は早めの昼食をとった。インドアー、アウトドアーで食事が取れるが、さすがにこの時期ともなると、外で食べる人はいなかった。ローストビーフ、スモークサーモン、燻製オイスター、チキン料理、各種野菜、果物、デザートなど書ききれない程、食べ物が大きなお皿や器に並んでいる。好きなものを好きなだけとって自分のテーブルに運ぶ。キッチンとテーブルを 3 度は往復した。何を食べても美味しく、これだったら朝食を抜いてくるべきだった・・と思った。このレストランから見る湖畔の雪景色もさぞ美しいことだろう。もう一度季節を替えて訪ねたい食事処である。

ホテルに戻る道すがら、面白いショップに立ち寄った。GENERAL STORE という名の通り、何でも扱っている。お店の入口に Gifts and Goods in Endless Variety と書いてある。日用品、家具、衣類、玩具、ベッド、骨董、大工道具、書籍、などなど「何でもあり」である。私は来年のカレンダーを買い求めた。12 枚のメルヘンの世界を描いたものと、12 枚のキルトデザイン集をまとめたもので、いずれも色彩の鮮やかな大きなカレンダーなので、家族に喜ばれた。

（１４）自 由 行 動

この旅行には自由行動の時間も用意されていた。学生時代の寮の部屋を訪ねた人、お世話になったホストファミリーを訪問した人、それぞれが思い思いの場所を訪ね歩いた。

私は２年間下宿生活をしていた家に自然と足が向かっていた。Dinky Town から１５番街を北へ１０分程歩くと Como 通りにぶつかり、１６番街へと通じる。その通りの右手に Mrs. Percy Brawn の家が今もある。１０年前にこの地を訪ねたときに、ご近所の方から９８歳のご高齢でなくなったことを知った。今は住む人もなく空き家になっている。裏に廻ってみると、台所の勝手口に付けられたサッシ戸の中央に、大きな「B」の文字が意匠されている。主人の生活ぶりを今に伝える唯一の証として懐かしく輝いて見えた。Como 通りに戻ると嬉しいことに４０年前に通っていた散髪屋が今もあった。髪の生え際をすべて電気バリカンで刈り上げ、頭頂部のみハサミで整え、あとはバキュームで刈り毛を吸い取る・・といった雑なやり方だったことを想い起す。記念にお店の写真を外から２枚撮った。それを見て接客中の主人が中から陽気に手を振って呉れた。私が通っていた頃の主人も話し好きの陽気な性格であったことから、二代目の息子であると確信した。

学生時代は下宿から学校まで自転車で通っていた。ところが一年の 1/3 は全ての道は雪で閉ざされ歩かざるを得ない。ある厳寒の日、いつもの通り１５番街の公園沿いをフード付防寒着の上からマフラーを巻き、目だけを外に出してキャンパスに向かって歩いていた。一台の小型バンが私を追い越したあと２０メートル程先でハザードランプを着けて止まった。不思議に思いつつ車に追い付き運転席に目をやると「乗っていくかい？」と目で合図している。もちろん有難く乗せてもらった。私の記憶に残る当時の「ミネソタ・ナイス」のストーリーのひとつでもある。

大学のキャンパスを散策したほとんどの人が訪ねた場所と思われるのが、ミシシッピ川を跨ぎ East Bank と West Bank を繋ぐ“Washington Bridge”であろう。橋の上の屋根付き暖房入り通行路は、特にビジネススクールのある West Bank に通う学生にとっては、冬の生命線でもある。ところが、藤井さんが学生であった 1960 年代中頃まではその通行路もない単なる陸橋であったと聞き驚くばかりである。風の強い厳冬のミシシッピ川を歩いて橋を渡って行くのは想像絶する寒さであったことだろう。

（１５）Farewell Party (Joint Party sponsored with JMA and JASM)

10 月 7 日（日） 17:30～20:00 （Maroon and Gold Room, McNamara Alumni Center, U of M）

JMA（日本ミネソタ会）と JASM (Japan America Society of Minnesota) は協賛して今回の旅行の締めくくりに「お別れ会」を McNamara Alumni Center の Maroon and Gold Room（ミネソタ大のスクールカラーにちなんだ名前）を借り切って催した。両方の会のゲストをも入れると約 50 人位が集まった。

JASM のような日米協会は、他のアメリカの大都市にも存在するが、ミネソタ日米協会は 40 年の長きに亘り活動してきた点でステータスが高い。その背景には、日本とミネソタの活発なビジネス交流やモンデール駐日大使の出身地であることも幸いしている。賛助会員の支援のもとに日本の文化を紹介し体験するプログラムを定期的に実施している。

JMA の岩波会長と JASM の Executive Director の Ben van Lierop 氏が息の合ったコンビで司会をつとめた。JASM の 40 年に亘る日米交流の推進活動の内容やそれに尽力した方々の紹介が Ben van Lierop 氏よりあった。岩波会長より、日本ミネソタ会の趣旨や活動を紹介するとともに、心の故郷でもあるミネソタへ今回このように訪問出来たことの喜びと、ご尽力いただいた方々への感謝の意が伝えられた。

食事はイタリアンのラザーニャとサラダを各自テーブルに運び、ドリンクバーで好きな飲み物をとってくる。各テーブルにはゲストを含め両方の会のメンバーが混ざり合って席につき、自己紹介を含めいろいろな話題に花が咲いた。私のテーブルには U of M を卒業後スリー・エムに 40 年勤続し今はミネソタに永住することを決意した日本人ご夫婦と日本光電工から Visiting scholar, Medical Devices Center に留学中の若い学生が同席でした。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

岩波さんがこのパーティーに備えてアトラクションを用意していた。ミネソタの最後の夜の想い出にラッキーパーソンを決める全員参加のゲームであった。全員が席を立って、司会の岩波さんを相手に「最初はグー(Stone), ジャンケン・ポン」が始まった。当然勝った人負けた人がいる。負けた人は着席をして、勝った人のみで 2 回目が始まる。３・４ 回続けると４名に絞られた。

そこで、この４名が会場の前方に集まってもらった。皆さんの前で勝ち抜き戦のジャンケンで１位～４位が決定した。ツアーメンバーの中では八木澤さんが勝ち残り（４位)、２位には、前日のチャリティーパーティーの車に乗せていただいたミネソタ医学部の中川先生、そして１位は Inkie Brons（本年度 2012 年のモンデール賞受賞者、元 JASM 会長）さんでした。１位から４位には、岩波さんが日本から用意してきた「おみやげ」が渡された。

このバンケットルームについて触れておこう。会議場にも宴会場にも催し会場にもなる多目的ホールである。天井は３階分位の高さで壁面は全て銅版がタイル状に張られている。最初外から入ってくると暗いかなぁーと感じるが、目が慣れてくると照明が銅版の黒と赤味に交錯して落ち着いた雰囲気を醸し出す。McNamara Alumni Center の一階フロアーにはこのような部屋が大小合わせて 5 つ位ある。年間のイベント利用が 900 回を超える盛況ぶりはこの雰囲気の良さからも理解できる。

最後に全員が集まり記念写真を撮った。ここに集った方々のそれぞれの人生を縦糸とするならば、今回の旅行がその方々を結ぶ横糸であった。今後、この縦糸と横糸が織りなすネットワークがどのような色模様を作り出すのか・・・ますます楽しみである。

井 尻 晴 久